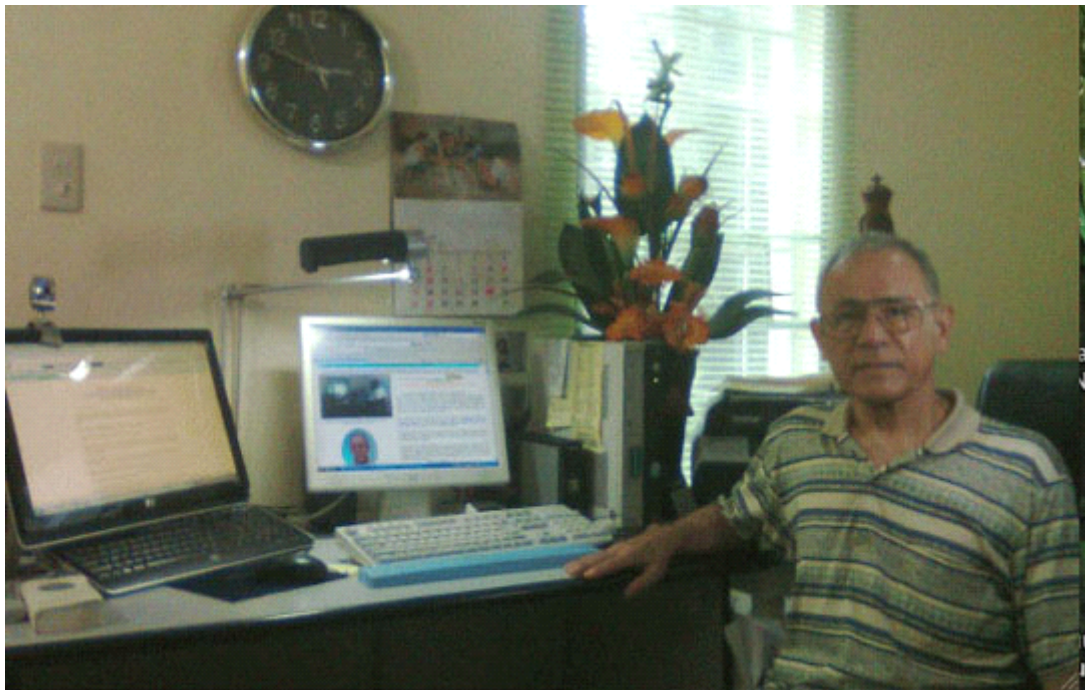


[Share on stumbleupon](#)[Share on reddit](#)[Share on twitter](#)[Share on facebook](#)[Share on linkedin](#)[Share on tumblr](#)[Share on google plus](#)[oneMore Sharing Services](#)

PRINT E-MAIL

2012年8月4日土曜日



フィリピン共和国ラグーナ州 サンタローサの自宅でくつろぐ吉田 祐起

## 原爆生存者が目指す "人生四毛作"への強い学び人生

ポリオや失った家族のことを克服して生きる、ヒロシマ生え抜き人間が成功を  
求めて活用している英語力

編集・コサカ・クリス [KRIS KOSAKA](#)  
ジャパントイムズ特別編集

80歳の吉田祐起は自身の人生を4つのものに分けている。でも、彼はそれぞれの人生に次の全力投球の心をもって生き抜いてきている；それは"永遠に生きるとして学び、明日死ぬるとして生きよ"という彼の座右の銘。



若かりし頃の吉田が弟の祐司(左)と横浜市の YMCA ビルの前でポーズ。同所で開催された英語弁論大会に参加した後のこと。

1945年の広島原爆の生存者として、若くして独立自営業、さらにトラック運送事業から総合物流コンサルタント経営を経て、現在は「第四人生」を歩んでいる。それはフィリピンでの新しい生活。結婚もして再び新規の生活に入っている。吉田にとって、永遠の学びの姿勢は生きていく上で永遠の課題とみえる。

1931年に広島市で生まれた吉田は幼児期にポリオに罹病。爾来、両足が不自由な身。小学校に入学直前まで自力で歩くことができなかった。それまでは両腕と両膝を使って這うようなもの。ために、腕っ節が強くなったと述懐する。

彼は両親と5人のきょうだいという引き立て役に元気づけられてきた。「私の母はハワイ生まれで、11歳の時に日本に帰国。母がよく言ったことは、『ポリオに罹っている人は偉大で聡明な人。アメリカ大統領のフランクリン・ルーズベルトをご覧ください。ポリオに罹る人はエライ人になるのよ』と」そんなことから、彼はポリオであることに密かなプライドすら抱いたもの。もっとも、当時としては敵国アメリカのことを良く言うのはタブーだったけど、と述懐。

彼にとって、本番の人生の苦悩の始まりは13歳の中学生時に学徒動員で働いていた時分のこと。身体が不自由なために、事務所勤務。ちなみに、他の学友たちは電車やバスの修理工場勤務。「ピカドン(原爆時の表現)」の瞬間は今なお鮮明だ。「瞬間、倒壊した建物の下敷きになり、猛烈な埃と異臭の中で息もできない状態。しかも、一寸たりとも身動きできない状態。そんな中、肢体不自由な身体のボクは絶望感で死を観念し、手を合わせたもの・・・」と述懐する。

ふと、頭上にほのかな明かりをみて、吉田は夢中でそれを目がけてよじ登った。麻痺した足で踏ん張ってでなく、両腕を頼りによじ登った感じ。「足が不自由でなく、通常の少年だったら、脱出してその足で自宅へ向かってすぐさま現状認識を得ただろうけど、私の移動能力からして、世の中が狭くて小さく感じたもの」と述懐する。

顔面3か所に大きな傷を負って鮮血が迸る中を、傍らの棒切れを杖代わりにして日赤病院を目がけて歩きはじめ、其処で緊急手当を受けた。その後、やおら家に向かう途中で家族の一人の姉と奇跡的に遭遇。その後、父と合流、後のふたりの弟と姉の消息がわ

からないまま、3人で30キロ先の田舎の叔母の家に向かって避難。ちなみに、母は直ぐ下の弟の疎開先を訪問中で市内不在中で難を逃れた。行方不明だった弟と姉は1週間後に救助されたものの、無傷の弟はその二週間後に無残な死を遂げた。

吉田は「原爆がわが人生にとって人生第一毛作を招来した」と信じている。しかし、何よりも先に彼の人間性を構築したのは身障者であるということ。彼は子供ながら、強くあらねば、と自身に言い聞かせてきた。「ボクの肉体的な障害そのものが人生を安易に歩むことを選択することなく、困難に向かって強くあらねばという生き方選択肢を抱かしめたもの。たえず困難な何ものかに挑戦する生き方をしてきた」と過去を想起する。

「父が早世したことから、長男の立場を意識して14歳にして働き始めたのはその第一発。ために、大学進学は断念した」と彼は言う。被爆で命拾いした父だったが、吉田の姉婿が営む製材工場で助っ人として仕事上の事故死。その義兄の進言で「生活力を把握すること」を最優先して選択肢としたのが職人人生。事実、彼は幼年期から生活力を把握したことが後年に至る彼の人生への自信になる。彼は後年に至り、その技術で開業独立し、数々の業績を樹立する。

その技術向上に役立ったのが彼の英語力。文献を頼りに米国の新技術導入に成功するなど若くして頭角を現した。翻って、戦後の幼年時代からの彼は英語を「音読」することを習慣づけたもの。彼曰く、「戦後に訪れたのは英会話学習ブーム。大学は断念したけど、英語力は学卒者に負けない実力を目指すと自身に誓ったもの」と彼は述懐する。

彼の英語学習の基本は「音読」。「ハワイ生まれの私の母は英語の発音をよく教えてくれた」と。歩けない私を背負った母が、歩きながら「Left, right, left, right!」と声をかけて歩いてくれたのが日本人の苦手なLとRの発音。全ては母の口移しで英語発音やイントネーションを学びとったようなも、と語る。

高校生時代に広島県下高等学校英語弁論大会で優勝したのはその一例。当時から、日本語による技術的な論文などを書くことを好きで始めた。その背景にあるのが彼の信念。「英語を学ぶことは私にとって永遠の課題。私が果たした今日に至るまでの全ての人生成功の背後にあるのが英語力。その学習への情熱に尽きる」と彼は言う。

独立職人自営業時代に戻ったのことに、彼の英語力が果たした実績がある。「LUMBER」という米書が発端となって彼が成し遂げた新技術の導入はその一例。製材業界の雑誌や書物が彼に思わぬ技術革新への道を拓いた。米国同業者関連企業等々との英語力を駆使した文通の結果がそれ。帯鋸のガス溶接技術導入はその最たるもの。その他の関連技術導入や自身の発明品開発等々の成功で一世を風靡したもの。

一時期、彼の技術開発論文が大きな写真付きで米誌「The LUMBERMAN」に掲載された。それを機に、同誌編集長から毎月最低2ページのスペースを提供するから寄稿してほしいという要望まで入ってきたと彼は言う。ちなみに、当時のお金で20ドルの原稿料を得たと彼は述懐する。青春時代のひとコマだ。

実用新案取得や新技術のアメリカからの導入によるそれらの指導のための執筆講演等々、活発な活動の中で、北海道から沖縄に至る広範囲の活動を展開する青春時代を不自由な足にも関わらずやってのけたもの、彼は述懐する。「二十歳時代からのこうした私の青春時代は肉体的障害にも関わらず、実にカラフルで、ある意味では夢多き人生だった」と彼は振り返る。

ところが、そうした彼の職業人生に大きな変化が訪れる。人生第二毛作(と彼は称す)への転換を招来したのものがある。それはある女性との恋愛結婚。彼女は子に恵まれない養父母の養女。養父が経営するトラック運送会社の後継者づくりのための養女といったと

ころ。その彼女と結婚するということは同家の姓を継承するというのが日本流。ところが、吉田は吉田家長男としてそれはできないという信念。結果として吉田姓で結婚したもの。ところが、彼女の養父死去に際してお鉢が回ってきたのが、その運送会社を継承する宿命になった。

当時は前述のとおり、全国を股にかけた講演活動展開中。(本記事には触れていないが、当時、広島県議会議長から、米国視察実習のために公費で米国留学をという誘いまであったのを辞退した経緯がある)。無論、吉田姓をもって同社社長に就任し、その後、実に32年間を同事業で活躍する。後年、彼はそれを「人生第二毛作」と称する。

かくして30数年間に及んだ吉田の経営する企業だったが、まがりなりにも7社、総勢100人規模のグループ企業を形成。夫婦の間に3人の子を育てた。この経営者時代にも彼は英語力を駆使した。米国のトラック業界との接点や同事業経営のノウハウ、なかんずく、米国が先導する「オーナー・オペレーター・システム(個人トラック制度)への認識に目覚める。(本記事には言及していないが)米国における「車体防錆処理事業(ジーバート)の広島県内ライセンスの取得」による新規事業開始などを手掛けた。

彼はまた在任中に、社会奉仕団体のライオンズクラブでも目覚ましい活躍をした。広島県内全域の「地区キャビネット」の情報委員長時代に手掛けたのが「地区誌」の編集長。任期中に取材を兼ねた各種の会合に出席した数は120件に及び、後にも先にも後続する委員長は出ないだろうとさえ評価された。

彼のライオンズクラブ会員としての認識は、「私がライオンズクラブに加入した理由は一つ。経営者として抱くべきは、事業の成功のすべては関連する地域や人たちの協力あってのもの。とすれば、それらに対する社会奉仕活動は一人の一企業でのものでは微弱。社会奉仕団体としてのライオンズクラブに属して、団体の総合力を駆使してこそ出来得る、という考えに立脚している、ということにある」と彼は考えた。

32年経ってのこと。恋愛結婚した彼の妻から彼女の元の姓を名乗る者が絶えたことから、その性を継がしてほしいという要求。つまり、離婚して旧姓に戻ることへの理解。妻の希望は旧姓を継承して、そのまま従来通りの結婚生活を、という些か世間に通用しない要求を受けて、吉田は決然と離婚に踏み切った。

かくして吉田はグループ企業経営のすべてから手を引き、自称「人生第3毛作」に踏み切った。株式会社ロジタントを設立し、「総合物流・経営コンサルタント」として単身の事業活動に入った。当年62歳。それからの彼の人生は彼独特の本領を発揮したようなもの。第一人生を彷彿とさせるが如き、全国を股に掛けたような講演活動展開に入った。

彼の処女作事業は5万語に及ぶ「個人トラック制度への提言」論文の業界誌への発表。日本におけるトラック運送業界最大の規制緩和提言がそれ。その連載第一号を見届けて米国1ヶ月間の単身取材旅行に旅立った。

彼は米国単身1か月取材旅行に先立ち、決心したことを述懐する。「一ヶ月間の長き滞米期間だが、その間をステッキ無しで過ごすこと」と。そのために、彼はひそかに決意して、毎朝のウォーキング訓練をステッキなしでやり遂げた。生まれて初のことだが、5キロをステッキ無しで歩き通した、と。

吉田はその前は1988年に訪米している。今回は1ヶ月間の滞在で大陸東西を突き抜ける1ヶ月間旅行。帰国した彼はそれから、続々と論文を業界誌(紙)に発表。一世を風靡したような執筆・講演活動に入った。(顧問契約締結で社員ドライバー教育を実践した企業は地元東広島市・東京・大阪・京都・福井等に及んだ。最大の成果は単行本「トラックドライバー帝王学のすすめ〜ザ・プロフェSSIONナルズへの教科書〜」(文芸社刊・全3

64頁)だ。

(吉田の第3回の渡米は2004年。当時の吉田は米国を本部とする SAM[The Society of Advancement and Management]の広島支部長の立場にあつて国際会議に出席した時のこと。彼が受賞した国際賞[Physical Handling Award]のラズヴェガス国際会議の受賞式晩餐会で340人を前にした9分間の英語スピーチをやり遂げて、口笛付きの熱烈なスタンディング・オーヴェーションを受けたことだ)

2006年6月のこと。広島で開催された経営者講演会に出席したことが「人生第4毛作」へのきっかけになる。引退後の人生をフィリピンにする決め手になったのが、同講演会講師を務めたフィリピン人講師。最初はマレーシアだった候補地をフィリピンにシフトするきっかけになったのだ。

第二の目的もあった。それは、第二次大戦時に日本がフィリピンに与えた多くの損害。それはフィリピン市民を含めた多くの将兵たちの人命損失の事実。日本兵やアメリカ兵も含めて、その多くの遺骨が未だに地下に眠っている事実等々があると彼は言う。それらの霊を弔う意味のフィリピンへの移住計画がそれだ。

2009年2月にフィリピンへ移住してからの彼は、それらに加えてもう一つの新しい目的を持っている。核兵器排除への提言活動や世界に向けたコミュニケーションを開始すること。彼はオバマ米大統領宛ての「公開書簡」も書いてホワイトハウスにも送り、かつ自身のウェブサイトに掲載した。ちなみに、彼のウェブサイトは日英語によるもので、彼の人生体験から多岐にわたり、武器放棄等の分野に至るものがある。

生涯学習の考えを持つ彼は、新しい彼の故郷でもあるフィリピンの探究も課題。吉田はその言わば養子縁組したとも言えるこの国のために、何か役立つことを計画している。そのために、非営利法人の設立さえ企画している。かくして彼は新しい人生の展開を楽しみにしているのだ。

夢見ることに老い過ぎることはない。吉田は言う、「何時の日か、ひとりの民間人親善大使として英語で講演して米国を回りたい。その目的は、私が若かりし頃に得たアメリカ人に対する感謝の気持ちを伝えるため、かつまた、原爆生存者としての想いを伝えるためだ」と。

(注)

本記事の英語原版はベテランのアメリカ人記者のクリスさんの手によるものです。必要に応じて出てきたのが、こともあろうに、記事被取材者である当事者の私自身の手による日本語訳。日本人離れした本場英語独特の表現が冒頭のタイトルから出てきました。その訳語にしばらく戸惑いました。翻訳とは言え、私自身のことだけに、なんだか面映い感じです。私の人生経歴が複雑多岐にわたるために、多くのEメール情報交換を主にした被取材作業や私のウェブサイトをご覧になったクリス記者のご判断等々に委ねられたものです。そんなことから、極めて若干ですが、ニュアンスの幾分異なる個所があり、その個所をカッコ内で補足を余儀なくしましたので、ご諒承ください。逆に、このことだけは補足しておきたいということをカッコ内で書き増しました。「へ～！これがヨシダの人生経歴か・・・」と思って読んでいただいたとしたら、当事者本人にとって望外の幸せです。有り難うございました。

(翻訳者:吉田祐起記:2012年8月6日 広島被爆67周年記念日に際して)

Back to [the original English edition](#)